mail magazine
noichi
no.67_December 2016
Published by an e-mail magazine editorial department.
All rights reserved. © utanoichi okuda. No part of this pubulication may be reproduced without the written permission of the Publisher.

第六十七号

# 妹・麗

メルマガnoichi67号、今月のテーマは「妹・麗」と題しまして、奥田雅楽之一の妹・麗さんをご紹介させて頂きます。
麗さんは、日本画家としてこれまでに数々の作品を生み出してきました。
現在はオランダに在住し、子育てと芸術活動を両立させている、とても頑張り屋さんです！

今年最後のメルマガ《noichi》は、僭越ながら、最近、日本画家としてのスタートラインに立ったばかりの私の妹・麗(うらら)のご紹介をさせて頂きます。私より十歳年下の麗は、幼少の頃より絵画全般に関心を持ち、音楽一家の環境下にあったにも関わらず、自らの意思で画家への道を選びました。

思えば、我家は両親も、現在パン屋を営む私の姉も、それから私も元々絵を描くことが好きで、ウマイヘタに関係なく、何かと描いてみる習慣がありました。我家の伝統的な遊び「お絵描きしりとり」は、例えば、りんご→ごりら→ラクダを言葉を使わずに絵のみで繋ぐ遊びで、よく技量を競い合いながら暇つぶしをしたものです。そういった時に、子供の頃から麗には突出した絵心があり、兄の私が言うのもなんですが、家族は麗の絵から非凡な才能を感じていました。

麗は数年前にオランダ人と結婚し、一児を授かって、現在はオランダに在住しています。今年は日本橋で自身三回目となる個展も開催するなど、家庭と芸術活動を両立させながら、マイペースに頑張っているようです。この機会に、どうぞお見知り置き頂ければ幸いでございます。

奥田雅楽之一

**どのような種類の絵を描かれていますか**

和紙と顔彩を使用するので、いつも日本画と説明することが多いです。ただ、墨や絵の具の滲みを防ぐドウサ(膠と明礬を溶かしたもの)は、紙本来が持っている個性を活かしたいので使いません。

**画家を志したきっかけは何ですか**(好きな画家や作品についてなど)

九歳の時、母と訪れた山口華楊展で感激したことが始まりでした。いつかこんな絵を描きたいと思いました。特に好きな画家は竹内栖鳳、西洋画ではカラヴァッジオです。

**描き始めて、また専門として描くようになって、何年くらいになりますか**

高校を卒業してすぐ、初個展に向けて作品制作を開始したので、(十八歳の時から)今年で九年目になります。

**どのような題材(モデル)を描くことが多いですか**

自然をテーマにした作品ばかりです。主に野鳥、植物、昆虫といった身近な生き物を描くことが多いです。実際に目にする機会が多いものほど、生き生き描ける気がしています。

**描くための道具はどのようなものを使いますか**

使用する筆は三種類、細かい部分には面相筆、広範囲には刷毛を使います。紙は和紙ならどのようなものでも特に問題ありません。着色には顔彩を使用しています。

↓次ページにつづく

**作品に所要する時間はどのくらいですか**（構想から完成まで）

構想に使う時間は短くて一日、長い時は一ヶ月以上かけて考えることもあります。その代わり、私は下書きをしないので、描き始めるととても速いです。だいたい一週間以内で完成します。でも最近は子育てもあるので、なかなか集中できず描きたくても取り組めないことがしょっちゅうです。

**描く上で一番大切にしていることはなんですか**

生き物の目を描く時です。全身全霊を注ぎます。

**描く上で一番大変な**（難しい）**ことは何ですか**

長く同じ姿勢でいると腰痛がつらいです。

**今までで特に気に入っている作品は、いつ頃描かれたどのような作品ですか**

それぞれの作品に色々な思いが込められていますが、一番最近に描いたものが好きです。題材はいつも花鳥や虫ですが、やはり作品には現状が映し出されますので、見ていて共感できます。

**現在オランダに在住とのことですが、作品への影響はありますか**

作品の雰囲気は変わった気がします。よく、以前より作風が明るくなったと言われます。

**音楽一家に生まれたことについて、作品への影響はありますか**

私は自ら演奏するのは昔から得意ではありませんが、音楽鑑賞は大好きです。バッハを聴きながら描くことが、私のルーティンになっています。

**最近の活動についてお聞かせください**

二〇一六年六月に、日本橋で三度目の個展を行いました。

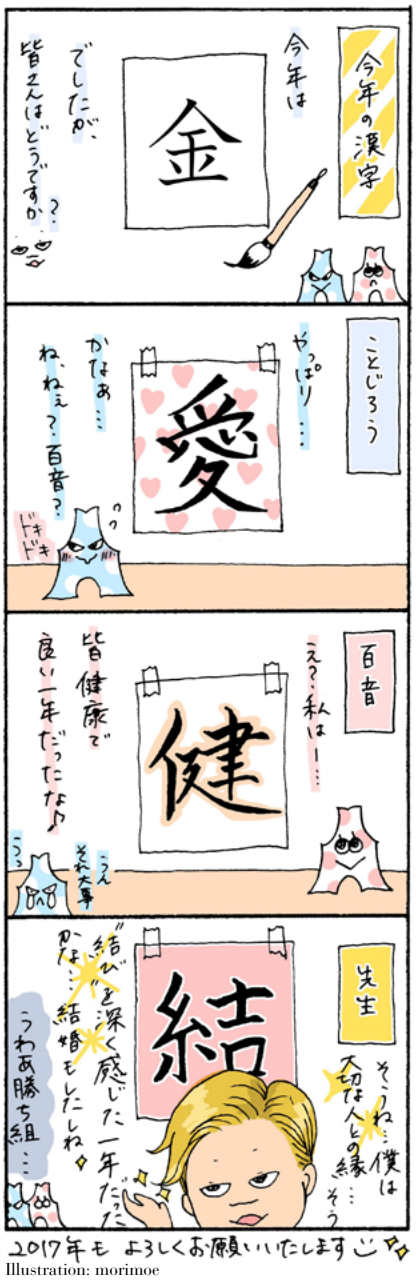

Illustration: morimoe

**今後の目標をお聞かせください**

いつかアムステルダムで個展をしたいと考えています。

**最後にお兄ちゃんに一言**

いつも妹のこと気に掛けてくれてどうもありがとう。分野は違うけど、同じ芸術家。この先も、お互い夢は大きく、胸を張って歩んでいこう。

奥田麗のウェブサイト：http://www.ulala-o.jp

◎あとがき◎

ピカソは晩年になって、「ようやく子どものような絵が描けるようになった」と言ったとか。小さいころから絵の英才教育を受けて、スペイン絵画を受け継ぐべく育てられたピカソは、小学生低学年でも子どもらしい絵を描いてない。だから描きたかったとも言えるかもしれないが、それだけでないだろう。アフリカのプリミティブな絵に憧れたように、稚拙で無垢な絵にこそ、現代絵画の未来があると真剣に考えていたのだ。そのためには学んでしまったスペイン絵画の伝統を壊して前に進むしかなかった。壊し続けるうちに、壊すことがピカソのスタイルになってしまった。破壊の過程こそがピカソの真骨頂だ。だから自分の絵をただ追求すればいいマチスが羨ましかったのだ。

日本の絵描きは晩年に代表作を描くことが多い。北斎などはその典型で、代表作はほとんど六十を過ぎてから。絵描きだけでなく、落語、能狂言、歌舞伎など、他の古典芸能も同じだ。若いころにピークを迎える西洋と違う理由は、日本人が求める自意識の無い世界。年齢を重ねることで意識が邪魔をしなくなり、いい意味で子どもに返っていくのだ。奥田家の二人の今後の変化が今から楽しみだ。

グラフィックデザイナー（http://www.1938.jp）みやはらたかお